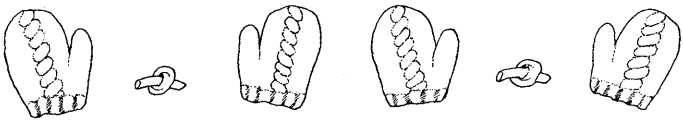


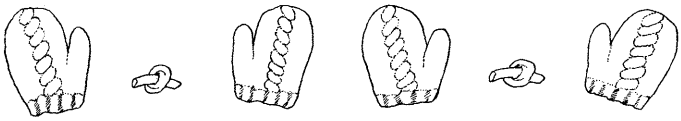
私が幼児教育を志した頃(15)

津守　真

私は米国留学中、米国の家庭に一月ずつ泊めていただいた。毎月引っ越すのは忙しくもあったが、新しい家族と知り合う好奇心のほうが大きかった。

コルレット家

五番目の家庭、コルレット家は、ミネアポリス市北部の勤労階級の住宅地域だった。一九五二年五月十日、私はコルレット家に移った。コルレット氏は軍の空港で大工をしていた。家族は五年生のトミー、二年生のマギー、幼稚園のチャックと、コル

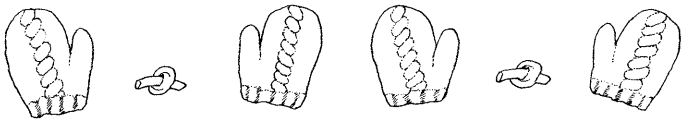


レット夫人で、夫人にはもうじき赤ん坊が生れるので大きなお腹を抱えておられた。コルレット氏はユニテリアン教会（自由神学の一派）で夫人はカトリックだったが、結婚するときにふたり一緒にプロテスタント教会に移る決心をした。アメリカ人にとっては大きな決断である。このことを夫妻は私に会うなり話された。結婚に当たって二人で同じ信仰をもって新しい生活を出発させようという共通の意志を私は感じさせられた。二人とも教会の日曜学校に熱心で、日曜日ごとに家族で朝早くから教会に飛び出して行った。

コルレット家には寝室が四つあった。私の滞在中は下の二人の子どもが一緒の寝室だったことになる。私はそんなことに気がつかずに泊まっていたが、一時的とはいえ、西欧人にとってはこれも大変なことである。私のために家族ぐるみで協力していた。コルレット夫人は近隣の人たちと垣根ごしに始終おしゃべりをしていて、そのたびに私は紹介された。コルレット氏は毎日家に帰ると地下室で大工仕事をして自分の新しい家のガレージを作っていた。

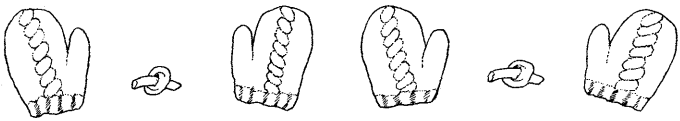
子どもたちはカブスカウトに入っていて、絶えず友達が出入りして、玄関前のポーチと裏庭は近所の子どもが溢れていた。

両親は教会の委員会の会合で頻繁に夜外出したので、近所の高校生のナンシーがベ



ビーシッターに来た。そのときは大騒ぎで、いつもはベットに入って十分もすれば静かになるのに、漫画を見るといってきかない子、足を洗わない、パジャマに着替えないと言い張る子、それにナンシーが加わって枕を投げたり騒ぎが大きくなる。この子たちはじつによく喧嘩した。私も始終その中にひきこまれた。ナンシーには弟がふたりいた。父親の口笛がひとつ鳴ると末の子が、ふたつ目の口笛で次の子が、三つ目の口笛でナンシーが家に帰った。ナンシーは活発で明るい少女で、稀に子どもたちが早く寝ると私共は学校の話をした。

コルレット家に行って間もないある晩、私はバスルームに水を飲みにいったら、マギーが二階の廊下で漫画を読んでいた。ベッドで電灯をつけてはいけないことになっていたので、小学校二年生のマギーは両親の目を盗んでベッドを抜け出してバスルームの電灯で漫画を読んでいたのだった。私が出会ったら急いで部屋に帰って行ったので私は悪いことをしたような気になった。しばらくしてコルレット氏の足音が聞こえた。私が自分の部屋に戻ったら、マギーはまた出てきてバスルームで読んでいた。コルレット家にはこの後二人赤ん坊が生れた。

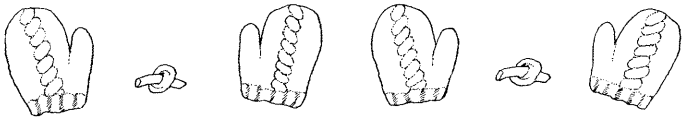


朝食

コルレット家の朝食は毎朝きまってパンケーキだった。コルレット氏が鯛焼きのようなパンケーキ型にメリケン粉をといて焼き、上手にひっくり返して皆に配る。皆はフォークを手にして順番を来るのを待っている。食べ盛りの子どもたちだからとても忙しい。

家族が食べている間に、コルレット夫人は皆に弁当のサンドイッチを作る。へたつきのパンを大ざっぱに切り、バターとジャムと、人参やブロコリーをはさみ、紙袋にいれ、皆それをもって学校に行く。前夜がローストビーフのときには豪勢だった。バターとジャムだけのときもある。私もその袋をもって大学に行った。コルレット家の子どもたちは、午後になって学校や幼稚園から帰ると鞄をほうり出して遊びにいった。コルレット夫人はその後始末をし、洗濯をし、それは忙しい。いつも背筋を伸ばして子どもの名前をひとりずつ呼んで、何か言っていた。

ある日、私が遅い時間に大学に行ったとき、コルレット夫人が階段の途中に腰掛けて泣いていた。知らずに私が通りかかった。一瞬立ち止まった私に、こんなところを見せて恥ずかしい、昨日姑が来たのだという。階段に座ったまま、長い時間話を聞いた。いつも気丈な人にこういうときがあることを知り、どこの国にもかわらぬ人間関

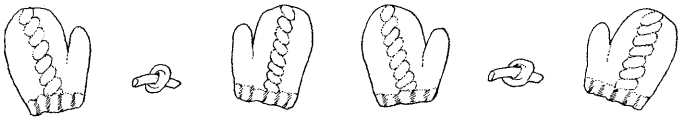


係を知らされた。

冬は雪に覆われたミネソタは夏が急にやってくる。エルムの並木が緑になると爽やかで、人々は戸外に出てくる。並木の間から、子どもの声がして、私の名前が呼ばれる。立ち止まって言葉をかわす。子どもから呼ばれるのは本当にうれしい。ライラックの紫の花が風に揺れる。毛せんを敷き詰めたように無数に咲いていた黄色いたんぽぽの花が盛りを過ぎると、桜の花が散るみたいに綿毛が空に舞う。

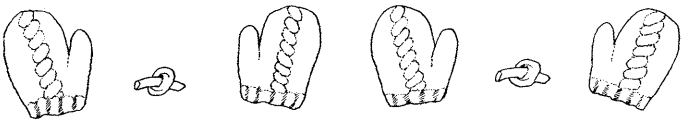
当時の米国の大学

米国に来てから半年が過ぎて、私の大学生活も落ち着いてきた。児童研究所で長く所長だったドクター・アンダーソン、言語発達の研究をしていた女性教授ドクター・テンプリン、私の指導教官であるドクター・ハリスなどから、夕食に招かれるのも留学生にとっては、励みになった。一九五二年五月末、ハリス先生から週末を北ミネソタの湖のコッテージに行くが一緒に来ないかと誘われた。ハリス先生夫人も一緒に半日かけてドライブした。ミネソタ州は一〇、〇〇〇の湖があると言われる。殆ど人も通らない道に、その年は毛虫が異常発生して、それを轢いたタイヤが空滑りして自動車が動けなくなった。そうすると私たちは車からおりて後ろから押してようやく目的

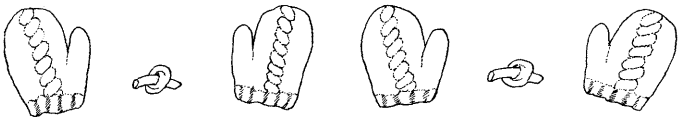


地に着いた。ルーン（鳥の名前）が泳ぎながらクーン、クーンと鳴いている。栗鼠が木々の間を跳び移る。鏡のような湖にスカールを浮かべて、三日間を過ごした。湖畔一帯、松と白樺の林で人影を見ることもない。とんぼが一杯飛んでいる。湖のすぐ脇のベンチに腰掛けて夕陽に光る美しい湖水を眺めて日本を思った。この付近だけで小さな湖が数百あるという。ひとつの湖を三十家族位で持っていて、人々はここに来ると電気もガスもなく原始的に生活をして過ごす。

夜になると、炉に薪をくべ、ランプに灯をつけて、暖炉の火にあたりながら話した。このコッテージは、一九三七年版スタンフォードビネー知能検査で有名なターマンの共同研究者であるメリルが、引き篭って仕事をしたところで、その後ハリス先生が譲り受けたのだという。その頃、科学心理学は数量化にエネルギーを注いでおり、知能検査はその強力な道具だった。知能検査というと、日本の学校の偏差値問題を思い起こすが、それはずっと後のことで、それよりもむしろ知能の恒常性、検査の信頼度、発達に及ぼす遺伝と素質の影響等の理論的関心が主であった。大学の講座でもディファランシャルサイコロジー（差異心理学）は人気のある分野だった。日本ではあまり関心を持たれなかった分野だが、少壮の心理学者ドクター・ジェンキンスの教室はいつも学生が一杯だった。知能検査を利用した数量研究は当時の児童心理学の主



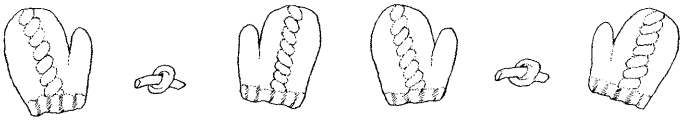
流だった。行動心理学はまだ緒についたばかりだった。米国でのピアジェ流行のきっかけをつくったのはミネソタ大学のフラヴェルだが、それも十年後のことである。ミネソタ大学児童研究所は、一九二〇年代にロックフェラーによって創設されたアメリカの七つの児童研究所のひとつで、メアリー・シャーリーらの地味な縦断研究はここの人たちの誇りだった。子どもの日常の行動を対象とした研究にここでふれたことは私にとっても幸いだった。これは生れて間もない乳児から、定期的に子どもを観察し、親にインターヴューして、子どもの発達の筋道を具体的に明らかにしようとした研究である。ハリス先生は、当時児童研究所が課題プロジェクトとしていたグッドイナフの描画による知能検査改訂の一部を、私のマスター論文にしないかとすすめられた。それはアメリカの心理学の研究法を実地に学ぶいいチャンスだと思ったが、私はむしろ、日本にいたときに疑問をもっていたひとつのこと、米国においてフレーベルがどのように批判され、進歩主義教育にかわったのかを、実際的、歴史的に追求したかった。これは日本では資料の得られない分野だった。こんな問題はアメリカの学生の関心外のことだった。私はハリス先生にこのことを話すと、自分だったらあなたが言うように、せっかくアメリカまで来たのだから、腰を据えて自分の関心を追求するだろう言われた。異色のことだけれども、私はこの後、図書館と付属のナースリース



クールにもぐりこんで幼稚園の歴史にエネルギーを注ぐことになった。ずっと後に、一九六八～一九六九年に、ハリス先生がフルブライト交換教授でお茶の水女子大学で半年間講義をされたとき、附属幼稚園を見て、アメリカに失われた懐かしい幼稚園の空気だと言われた。そしてこの幼稚園を絶やさぬようにと何度も言われた。ハリス先生はペンシルヴァニアでいまもご健在である。二〇〇〇年の秋に、現在の附属幼稚園副園長の桝田さんから頂いたお茶の水女子大学附属幼稚園の四季の絵葉書を送ったところ、それを非常に喜ばれた。

アメリカインディアン

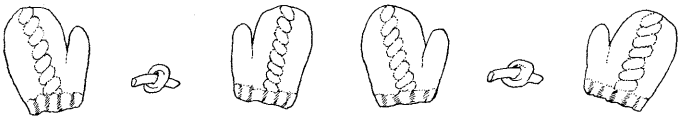
ハリス先生のコッテージに三日間滞在の後、帰途アメリカインディアンの部落に立ち寄った。アメリカインディアンは髪の色も眼の色も黒くて、日本人の顔に似てる。私を見ると子どもたちがすぐに寄ってきた。当時、ところどころにインディアン保護地区があり、服装や住居もむかしのままに、いわば原始生活の展示場のようになっていた。土産物屋が並んでいた。私は日本人の先祖の生活を見たような気がして、心が痛んだ。このときの印象のせいだろうか。私は米国滞在中に北川台輔先生が主催されていたアメリカインディアンの集会に何度もいった。都会に憧れて出て来たインディ



アンの青少年の生活が退廃するのを見て、北川先生は日曜日の午後、日本人教会で食事やレクリエーションの会合を開き、生活の相談にのっておられた。何人もの私の知っているアメリカの婦人たちがこれに協力していた。これから五十年の間に米国の社会はこの点で驚くほどの変化を遂げた。マイノリティの差別の問題と取り組み、一九九〇年代末には国連は国際先住民年を定めるほどになった。私は米国を訪れるたびにそれを見て驚いた。特別に大きな運動をするというのではなく、さりげなく日常的に、沢山の人たちが疑うことなくこのことに力を注いでいた。米国には多くの問題があるが、この点ではこの半世紀に米国の社会は進歩したと言ってよいと思う。日本がバブルの時代のことである。

「かわいそうなインディアン。いったい現代文化ってなんだろう。まるで動物みたいに白人に駆り立てられて、逃げ回って、そして見世物になって、かわいそうなインディアン。」と私はその日の日記に記したが、五十年の間にすっかり変化した。

私がコルレット家にもどった翌日は教会で「子どもの日」だった。いつもより少し良い服を着た子どもたちと一緒に私は朝早くから教会に出かけた。私が小さいときから耳に懐かしい讃美歌、「再び主イエスのくだります日、召さるる幼子み国にて、み空の星と輝きつつ、主のみ冠の玉とならん。」が歌われた。そんなときコルレット夫



妻は大張り切りだった。

コルレット氏一家は、第二次世界大戦が終わったとき、占領軍として仙台に駐屯していた。そのときの焼け野原の日本を見て、心打たれたという。私がコルレット家にお世話になっていたのは日本がまだそこから立ち上がれていない時期だった。

その翌日六月九日に、ソニーの井深さんがミネアポリスに来られた。倉橋惣三先生のご長男倉橋正雄さんはソニーの創設者のひとりで、私は愛育研究所の古い円盤録音機を使えるようにしたい思い、それをかかえて井深さんと倉橋さんを目白に訪ねたことがあった。そんなご縁で早くから井深さんが来られるのを待っていた。ミネアポリスからバスで一時間ほどかかるセントポールホテルに井深さんを朝早くに訪問した。勿論ソニーの看板もネオンサインもアメリカの町に見られなかった時代である。